

IV 大都市近郊農業の可能性と 都市農業政策の推進及び市民の役割

「まとめ」としての意見交換会



論点1: 【見沼たんぼ地域の農業振興の可能性】

●さいたま市の立場は9月12日の基調報告で発表しました。

●さいたま市全域の農業は高齢化、後継者不足により耕地の荒廃化が進んでいますが、農家人口の減少の中で生産農家の経営の安定化を図らなければなりません。

●情報誌、直売所などの拡充やブランド化・加工化などで消費者が農業への関心を持ってもらう必要があります。

●市内大型ショップでは直売のニーズは多く、見沼たんぼ産ブランド品の需要は極めて高い。「未来遺産」ブランド品が2月から発売される。ラベ

ルやのぼり旗を整え販促したい。可能性は大きい。

●見沼たんぼ地域内においては、大崎に「農業交流施設の整備」を検討中です。平成27年6月市議会で基本構想を報告し、市議会だより「ロクマル」(9月号)で概要が広報されましたが、詰めるべき懸案が多く、明確な発表ができない段階です。

●見沼たんぼは都市化の影響を強く受けている。残土による農地の埋め立ては、農地の効率を考えたものではなく、埋め立て業者の利益追求によるものです。

●反面、都市近郊のメリットを生かし都市住民参加型の農業は可能性があります。

●農家だけでは農業を支えていけない。みんなで

支えていく考えが必要で、今が踏ん張り所であると考えます。一回壊せば取り返しがつきません。

●見沼農業はコメ作り以外でも教育的価値がある。

●農業者として、市民との交流の場が必要と感じます。

●「農業祭」来場者に直売所に関するアンケートをしたところ、極めて高いニーズがあるという結果がでました。(47~48ページの参考資料をごらんください。)

●周辺住民(非農業者)と農業者の交流ネットワークが必要。

論点2: 【見沼たんぼ地域の農産物の 価値を高めるための方策】

●未来遺産ブランドとして、行政・市民・農業者でPRする必要があります。

●農産物だけではなく、環境も含めたグリーンツーリズム的取り組みも必要です。

●市内でビジネスマッチングができるとよい。市役所が絡むと、信頼度が増すのでよりスムーズに進むことが多いので、紹介など行政からのバックアップをもらえると有り難い。

●知らない人が、ぱっと見てぱっとわかるロゴマークなども有効。

●大都市のど真ん中で農業体験のできる場所としてのメリットを生かすことで、価値を高めることができます。

●見沼ブランドのキーワードとしては「新鮮・安心見沼産」と「未来遺産」ではないかと思い、ロゴの試作をしてみました。

●ブランドの使い方、使用についてのルールなどは、これから協議して決めていく必要があります。

●ブランドは何に使うのか、誰が管理するのか。農業祭では、市内に住んでいても農地が市外にある場合があって、そのため「さいたま市産」ではなく「埼玉県産」表示を使用しなくてはならない、などいろいろあります。

●ビジネスマッチングについては、武蔵野銀行などが情報提供や紹介などしている例もあります。

●マッチングについては、直接、市のほうに問い合わせがあることもあります、行政としては個別の紹介をすることは難しい。学校給食での地元産農産物の使用についても、学校と農家との直接交渉になっています。

●行政とも連携して、広報力を高めていけたら望ましい。

論点3: 【市民・市民団体等の応援策の展開方法】

●見沼の農産物に市民が触れる機会を増やす(市民の体験活動時に農家の協力・農産物の



IV 大都市近郊農業の可能性と 都市農業政策の推進及び市民の役割

「まとめ」としての意見交換会



購入機会を増やす)

●農作物紹介のため、情報紙誌の定期化、ネットワーク化する仕組みが必要。

●見沼は地域的に恵まれ、近郊農業の可能性は充分ある。「見沼(田んぼ)ブランド」を活用すべき。大消費地に近いので、市民に興味を持たせ、市民と一緒に農業や商品化が可能。

●環境保全を目的に水田を残したいため、小規模な援農活動を15年続けているが、団体のメンバーも高齢化し実働人数が減少しつつあります。斜面林が切り倒され、水田も埋め立てられ心配しています。

●見沼ガイドクラブとして、見沼に興味を持たせるには、まず見沼地域に、魅力・価値・良い田園景観が必要と考えます。

●良好な水田景観の残る加田屋新田地区、片柳・見山地区、新都心近くの上山口新田地区、

市民の森南側などのすぐれた田園景観をもっとPRする必要があります。

●市民農園の環境や景観を改善するには、市民・行政・農家が共同で、市民農園のルールブック（八潮市の事例などを参考に）を作成するなどより良い関係を持つべき。

●グラウンドワーク川口は、元々が自然保護団体のため、大都会近くで「自然が残る見沼」を残すため無農薬水田での体験活動を始めたのが主な目的。

●大都会の近くなので、見沼をなるべくスマートに見せることが大切。汚くすると人は来なくなる。

●自然観察会・農業体験活動会で、野菜の嫌いな子供に、農園で採れた野菜を食べさせる中で野菜嫌いがなくなるなどの食育の効果もありました。

●今までHPも宣伝もして来なかったが、大事のは、イベントや農家とのタイアップで、まず来て貰

い体験し、口コミで人を増やすこと。

●県の広報で、若い主婦・子供の反応はあるが、収穫体験時しか参加しないケースも多い。恵まれた地域なので、まず野菜作りなどの体験に興味を持たせれば参加者も増えるのではないかでしょうか。

●カンゾウの花、菜の花畠、桜並木など恵まれた田園環境なので、見沼たんぼ地域の価値を高めるマニュアル作成や地域の人とのヨコのつながりを深める必要があります。

●個々の市民団体の集客力も高まっているが、より、農家さんとの連携を深め、活動の質を高めていくことが課題ではないでしょうか。

●見沼たんぼ地域に特化した情報交換・ニュース等ネットワーク化が大切。「みぬま通信」での農家紹介、農家と周辺住民とのネットワーク形成、農産物を販売するボランティア募集、及び販売場所を増やすなどを充実させていく必要がある。（浦

和駅の新たな構内店に、さいたま産の野菜が置いていないのは残念）

論点4: 【農業者と市民の多様な 交流の機会と場づくり】

●見沼田園政策推進室が推進しているプロジェクトが3つあります。

①プロジェクト1 「地域資源情報発信」

市民ネットワークを組織しホームページやガイドブックの作成、写真コンクールの開催等を行ってきたが、その参加に対し農業者が消極的だった。情報共有だけでは限界があることが顕在化しました。このため農業者や地域住民合同の交流の場を準備中です。

②プロジェクト2 「見沼散策環境向上」

市民が快適に散策することによって市民が見沼たんぼを一層理解してもらうため、市民参加のワークショップを開催するなど環境づくりをしています。



IV 大都市近郊農業の可能性と 都市農業政策の推進及び市民の役割

「まとめ」としての意見交換会

③プロジェクト3 「新たな交流の場の創出」

誰でも立ち寄れ、集い、見沼たんぽを学習し情報を得られる新たな交流の場として「さぎ山記念館」を検討しています。平成28年度の整備を目指しています。

●農にかかわりたい人が多くなっています。このような風潮の中で土を通して子供たちに伝えたい。ただ集客には行政の力が大なので援助がほしい。

●努力して見沼たんぽ産農産物を売ろうにも販売場所がない。

●農産物加工所の拡充を望みます。

論点5: 【新たな農業の担い手育成に向けた 実践的な農業教育機能づくり】

●農業生産の人材育成だけでなく販売までも含め

た6次産業化の担い手を育成する必要があります。それには、いろいろな経験者がいる市民団体とのネットワークが有効。

●ネット上だけでなく、さぎ山と大崎という2つの交流拠点ができるので、これを活用する。

●いい形での人材育成・ネットワーク作りを目指したい。

論点6: 【まとめとして 見沼たんぽ地域農業振興に 向けた今後の取組み方】

●農業経営者さんと市民団体との連携・連絡会議を作ることが必要です。

●さいたま市行政が計画している交流拠点とともに歩んでいくことも大事。(交流拠点としては、大崎地区、上野田のさぎ山記念館、土呂のグリー

ンセンターなどが想定される)

●行政と一体的に活動を展開しないと、市民全體への呼びかけの実効性が少ない。

●見沼たんぽの全体としての回遊性を高めることが大事です。

●日本ユネスコ協会に認定された「未来遺産プロジェクト活動」は、市民団体や農家さんとの連携活動であり、行政的な予算はつかないが、連携・連絡会議の活動を充実させれば、更に見沼農業を魅力あるものにしていくことも可能です。

●林業体験を含めた斜面林利用方法も考えている。見沼たんぽの農業は、環境保全も視野に入れ、農地・斜面林などが一体化したアピールも必要だと思います。

●市民の森の南側や加田屋新田地区などで、埋め立て業者による盛土が増えている。農的な環境の破壊とともに、見沼の植物などの自然環境も脅かされています。

●市民団体は農業を続ける農家の応援団としての存在感を高めていくことも求められる。

●農業経営者さんと市民団体の連携・連絡会議を作り、その中で応援活動の仕組みづくりを考えていきましょう。

●見沼たんぽ地域には、農業・環境・教育・交流・ビジネスなどのあらゆる場面の可能性があると考えています。

